

に輝やいていられました。同じ学校の一室に青年学校の研究生として三歳下の私は憧れておりました。

母上と貴女と幼い男児を残した御主人の葬送の日、悲嘆のどん底の貴女をお慰めする術もなく遠く見守っていた私。後の苦難の道は住いも畑も近く、つぶさに見てまいりました。

昭和三十九年八月に川北一雄先生を指導者と仰ぎ、六人の同志と発足した歌会。会場も転々とし、作歌と共に万葉集の講義、春秋の吟行、五十二年の蔵王行きには私の用意して下さった草履で残雪の熊野岳の頂へ瓦礫の山を助け合って這い登り、茂吉の碑前に立った時の嬉しかったあの日。

平成元年四月に先生が逝去された後の歌会を貴女が中心となつて下さいました。女性としての素養は勿論、歌は口も含んだ繭の糸を引き出すようだとおられた貴女なのに亡夫への思いは一首さえ発表されませんでしたね。それが昨年、椿神社への献詠歌

母を頼むとわが夫の終の言葉我は忘れじ五十年経てを見た時、ハッとしました。これこそ貴女の半生を貫いたお心であつたと受け止めました。

平成十年九月二日、予期せぬお別れとは。今はただ安らかに眠り下さいませ。沢山の想い出、御指導と友情を命ある限り私は忘れないでしよう。有難うございました。
(平成11年1月記)

〈追悼歌〉

桑原 和子
避暑なのよと笑ませし君は病院のベッドにひとりかなし
かりけむ
・ころ許し語らひ呉れし君なりき亡き今にしてしみじみ
こほし

古市公美子
・「まあ上つて」の声やはらく耳たぶになほまつはれど
秋深みゆく
・神道の家すじゆえに数珠持たずと幸綱先生君が御墓に
・冬至にはとしどし袖子を賜りき君亡き庭に実のたわわな
る

・取り木して賜びし水木の花の芽がたくさんつくと誰に告
げなむ
・竹柏園の大人のみ弟子の鈴持もち病床に君は歌詠みましき
加藤 弘子
・守る田より駆けつけましし髪汗初にまみへし石薬師歌会
・白木蓮画面豊かに溢れしめ句へば君の才を妬みき
・川北先生まなざし遠く言ひましき在りし日乙女君の嫺やか
かさ

・教へ子の招きに装ふ藍きめてうつそみ篤き君と思ひき
・豊饒の海と虞しめど入りゆくも漂ふも得ず我は淋し
る



| 次 目 | |
|-------------|------|
| 創刊当時の『ころの華』 | 島田修三 |
| 展示室だより | 島田修三 |
| 信綱一首・13 | 村田邦夫 |
| 卯の花の里だより | 編集機 |

創刊当時の『ころの華』

島田修三



島田修三氏

必要があつて、明治31年2月の創刊号から数年間にわたる『ころの華』（創刊当時の誌名表記）バックナンバーを調べたことがある。当時の執筆者をカードに書き抜いてあるが、今あらためて眺めてみると、実にもう多彩なメンバーがこの明治の新雑誌に寄稿している。

第1巻（明治32年2月号・同12月号）では、実質的な編集責任者（創刊号には編集者石樽千亦と記される）佐佐木信綱が創刊号に「我らの希望と疑問」という初々しいエッセー掲載を皮ぎりに、勅撰集、賀茂真淵、加藤千蔭撰百人一首などを論じた文章を立て続けに載せ、若い信綱の新雑誌にかけの意欲が十二分にうかがえる。外部寄稿者に目を移すと、当時の御歌所所長だった高崎正風の歌論が三回、同じ

く御歌所寄人の武島羽衣の歌論が四回、新体詩人の大町桂月の歌論が二回、同じく新体詩人の大和田建樹の講演記録が四回連続で掲載されており、さらに新派歌人のエースと謝野鉄幹が韻文詩を寄せ、新派和歌結社「いかづち会」（尾上柴舟、服部躬治、久保猪之吉など）の歌も掲載されている。要するに、旧派歌人と新派歌人、新体詩人といった文学史的には敵対していたかに見える多様多彩な文人たちが『ころの華』に集結しているのである。この傾向は第2巻以降も持続し、旧派歌人では高崎らのほかに小出榮や下田歌子や落合直文などが寄稿、これに対して新派からは与謝野鉄幹や反鉄幹の「いかづち会」のほかに、正岡子規以下「根岸短歌会」のメンバーが続々と寄稿して来る。例えば、子規の「はがき歌」や伊藤左千夫の初期歌論は『ころの華』に発表されたのである。

こうした歌人たちに混じり、例えば明治35年の第5巻までをざっと見ても、末松謙澄、上田万年、上田敏、高山樗牛、幸田露伴、尾崎紅葉、木村正辞、土井晩翠、福地桜痴といった学者、評論家、小説家といった錚々たる文人たち

が寄稿している。当時の「こころの華」は、さながら芸芸総合誌の観を呈していたのである。この開放的な編集方針は二年ほど遅れて創刊された『明星』などにもうかがえるが、『アララギ』を始めとして流派セクシヨナリズムおよび短歌プロバに閉ざされた短歌結社誌が主流となる後の歌壇を考えると、「こころの華」の編集方針には短歌を広々とした同時代の文学状況の中でシビアに問い直すという凛然たる意志を感じる。

この凛然たる意志を雑誌におつけたのは、言うまでもなく佐佐木信綱である。温和で中庸を重んずる学究歌人というあたりに後世における平均的な信綱観や信綱評価があるように思うが、なかなかどうして佐佐木信綱は屈強な意志のかたまりみたいな人物だったのである。と同時に、その意志はかたくなに自流派にこだわるような排他的なものではなく、短歌そのものを同時代の文学の視点から広く、さらにまた学問的な視点から深く問い直すという高い識見に支えられていたといえよう。

新派和歌から近代短歌、さらに現代短歌に至る滔々たる流れには、短歌を新時代の文学として刷新したいという歌人たちの見果てぬ夢がとぎれることなく貫かれており、近代短歌史の重要な分岐点を、若い歌人たちが担ったという事実がそれを端的に語っている。明治30年代のロマン主義は『明星』に集まる青年歌人たちが担い、写生論を基軸と

するリアリズム短歌を提唱したのも若い正岡子規である。明治末期から大正初年にかけての自然主義文学運動もまた石川啄木、前田夕暮、土岐哀果、若山牧水といった二十代の歌人たちが推進した。プロレタリア短歌運動や戦後の前衛短歌の登場もみずみずしい青春性に彩られている。近代短歌とは、つまり青春の産物だといえるかもしれないのである。

そうした若い歌人集団が牽引した近代短歌史の急流にあつて、佐佐木信綱の率いる『心の花』は木下利玄、川田順、前川佐美雄といった際立つて個性的な一匹狼を巣立たせた結社であると同時に、地味で目立ちにくい、他ジャンルの文学や学問をも含めた、相対的で混沌とした開放性の中からたつぷりと短歌をとらえて行こうとした結社でもある。旗幟鮮明な方法意識や、それ故の激しい党派性もまたなかつたが、しかし、実に豊かな幅と奥行きをもち続けたことを見逃してはならない。創刊当時の「こころの華」が示した編集方針には、そうした幅と奥行きが鮮明にうかがわれるのである。
(愛知淑徳短期大学教授・歌人)

展示室だより 平成10年は、佐佐木信綱がその短歌結社竹柏会を興し、機関誌『心の花』を創刊してから一〇〇年に当る。現代文化史のうえでも稀有のこととして各界から祝福された記念の年でもあった。このとき、当展示室に貴重

な一資料が飾られることになった。「願はくばわれ春かぜにみ(身)をなして憂ある人の門をとばばや」。信綱自筆のこの一首こそ百年前、明治32年(一八九九)4月6日、竹柏会第一回大会が日本橋倶楽部で開催された時、弱冠28歳の若き主宰者信綱が当日の兼題「春風」に托して竹柏会の精神を宣言した代表歌である。

今回この詠草額を寄贈くださった東京都日野市在住の高橋尚樹氏は、青年信綱の周辺に集った若き歌人たちのひとり、高橋刀畔(とうはん)の令孫である。



信綱自筆の歌
殺重子らに並び氏の歌
が出ています。
明治3年、千葉県佐
原町生れ。本名竹次郎。
水郷利根川畔に住居し、
すすきの葉が刀身に似

ていることから刀畔と号したという。(尚樹氏談) いま当館壁面に掲げられている信綱系歌人図の上段に、かもめ会・角利一と並びその名が記されている。
(文化財保護課 辻 正)

卯の花の里だより 平成十年八月三十一日、石薬師歌会の代表であり私たちをいろいろな面でも御指導いただいた大森美枝さんが忽然として逝かれた。大森さんは、昨年七月ごろから体調をくずし入院されていたが三十一日、急に容体が悪くなり夕方、息を引き取られた。享年七十八歳。昭和三十八年、信綱先生の御逝去を期に故北川一雄先生の呼びかけで石薬師歌会に生まれた。平成元年五月、会発足当時から代表北川先生が他界されるやそのあとを継がれ、名実ともに歌会の指導者として会の充実に努められた。ここに御冥福をお祈りするとともに会員の方から寄せられた追悼記と歌を掲げることにする。(編)

亡き大森美枝さまに捧ぐ 桑原 和子
若き日、石薬師小学校の教師として、大森安正先生と共に

信綱一首・13

舟と舟かる口いうて下りゆく
月の潮来(いたこ)の夜のほととぎす

晩年自編した全集本信綱歌集にのみ載っている未刊歌集の『銀の鞭』から、老信綱の意図は、自分の眼で自作を再検討しておきたかったであろう。『思草』『新月』に継ぐべき初期の作。重厚を本領とするその詠風が、折々見える軽妙な気品。水郷の旅情にふさわしく、二句の伊勢訛も効果的であつて、佳いしらべを成している。
(村田邦夫)